

---

# 謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

### 【Zコード】

Z3742Y

### 【作者名】

時雨

### 【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目を覚ますと一つの部屋にいた。  
扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによつて並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃつたり、原作とは一味違う技習得しちゃつたり、んで何故か難事件に挑んじゃつたり、様々な出来事が起こっちゃいます。  
楽しんで見てください。

田を覚ますと・・・(前書き)

初の一次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください！

## 田を覚ますと・・・

田を覚ますといつもの朝だつた。  
眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入つてくる。小鳥たちのさえずり  
が聞こえてくる。  
いつも通りの朝だつた。だが一つだけ違つといろがある。

「・・・どこだこい？」

俺、高嶺 朱雀たかみねすざくはとある部屋のベッドにいた。  
しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうな  
あの無駄に広い部屋だ。

力チャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お氣きづきになられましたか」

そこには黒のダークスース姿の男がいた。

「後氣分ははどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょ？」

「あなた誰？」

すると男は、

「おつと、申し遅れました。私ここで執事をやらせていただいております黒野という者です。以後お見知り置きを」

「執事？」

「はい。朱雀様の旦那様から雇われました」

「父さんから！」

俺は目を丸くしながら言った。

「は、はい。作用でござります。覚えていらっしゃいませんか？朱雀様。昨日の事を」

「昨日の事?」

よ~く思ひ返してみた。すると一つの答えにたどり着いた。

「あー。まさかかとは思うが昨日、突然意識を失つたのつて・・・」

「はい。旦那様が朱雀様の首に一撃を入れて、氣を失わせたためでござります」

「ああ。。。そ、う」

その時、俺は内心思つた・・・。

『……』と、心の中で呟んだ。

そんな事を気にせず黒野は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整つておりますか?」

入学式？

「はい。明日は並盛高校の入学式で『Jedi』ます」

「これも田那様の計らいで、これあります」

「い、いや。まだだけ」

「作用で」<sup>1</sup>おぞこますか。それでは「用意いたしました」<sup>2</sup>「」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはながーいクローゼットが出てきた。

「えーと・・・」  
「されば?」

「お嬢様の母から一セット、制服を選んでいただきまーす」

「選ぶつて・・・これ何種類あるんだよ・・・100はあるんじゃないか?」

「正確には112種類でござります」

112!

再び俺は田を丸くした。

「何でここまで作ったんだか・・・いつそ私服校の方が良かつたんじやねーか?」

「それは困惑でござります」

「しゃーない。ひとつと選んでおまうか!」

とは言ったものの、普通に一時間もかかってしまった。やはつこ今まで多いと時間はかかるわな・・・。

結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチョックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ

「そりやビーも」

「では、次はカバンなのですが

「まだ選ぶのか?」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、etc...」

「あー分かった分かった。とにかくおまうじまおつ

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下げ型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方の頃だつ

た。

「やつと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野は「一レールを机の上に置いた。

「やつこえば、ここから並盛高校は近いのか?」

「はい。歩いて15分の所で」

「チャリで10分といつたところか・・・」

「自転車で行くおつもつですか?」

「当たり前だらかな近いなんならわざわざ車で行く必要無いだらう」「いえ、やつむつ事ではなべて無いので」

「えー、そつなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行つてその後で買に行くが」

そうしてかれこれ一時間が経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・やつむつ寝るか」

「やつじて俺は慌ただしく一日を終えた・・・。

田を覚ますと・・・（後書き）

いや～何か見る限りほとんどのオリジナルになってしまいました。

## なんか・・・ねえ・・・(前書き)

### 第2話

いや～今回は前回よりも長くなつてしましました。頑張つて読んでください。

あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したものだらう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちかね！」  
朱雀様

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには「ひのこの」のロングパンツと寝中時計があつた。

「これは？」

「ひのこのは並盛高校から贈られてきたものでござります。なにも個人認識のようなものだとのことです」

「ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとうございます」

俺はリングをチョークに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れ  
た。

「それじゃあ、行つてきまーす」

「行つてらつしゃいませ朱雀様」

＼・＼・＼・＼・＼

今、俺は一年生の教室にいる。だが・・・これは・・・ねえ・・・。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが・・・』

分かりやすく言つてしまえば、工の第1話でゆう一的氣分である。

ただ一つ違つとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが・・・その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ・・・怖いよパート・シユ・・・。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

「ああ。そういうえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田・・・綱吉だったかな。帰つたら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わつたんだが・・・未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よつー俺、山本 啓信けいしんで言つんだ。よろしくな!」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりやあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういうばあつたな・・・あん時は驚いたよだつていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやつた。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。

それで気づいたのは、

「みんなほんとんどデザインが違つんだな」

「まあな。リングの『ザイレン』によつてそいつが『Jリ』に所属するかがほとんど分からぬ」

そこで山本は、

「そうだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ ああ。 いいけど」

俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おーーやっぱ朱雀もアーマルリング持つてんのかー」

## 「アーニマルリング？」

「ああ。アーマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・」

「これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つね？」

「ああ。これは・・・」

すると山本の見る目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング？」

「ああ。IJの学校の中では三つのアランクオーバーのリングを持つフアミリーがある。シモンフアミニー、ミルフィオーレフアミニー、そして、ボンゴレフアミニー」

「その中のボンゴレフアミニーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え？」

俺は頭の中に?のマークが浮かんだ。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もアランクオーバーでボンゴレフアミニーだ」

やつぱりか・・・。ん? いやい? とは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるみたいとか、ボンゴレのアランクオーバーが」

「まあやつらになるとなるな」

「いつたい誰だ?」

「まあ一人はめぼしあついてるんだがな」

「え? 誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」「そつか・・・んじやあ明日会つてみるか」

「ああ。んじやあ今日ほこれで」

「おひ。また明日」

そして今日は帰宅した。

「・・・」帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でいじこまじょう?」

「お前、うひの校長先生について何か知つてゐるか?」

「校長先生と言つますと、名前は?」

「確か沢田 綱吉だつたかな」

すると黒野の手が止まつた。

「ん? どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでござりますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「の方はボンゴレ<sup>デーチモ</sup>。ボンゴレファミリー十代目でござります」

「え・・・ウソだろ・・・」

「もひ帰つていらしたのか・・・」

「なあ。何でお前校長先生の事知つてるんだ?」  
「私は・・・」

その後、黒野の言つたことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからで、」<sup>ヤマト</sup>「

「なん・・・だつて・・・」

「守護者といつても正確には少し違いますが・・・」

「どうゆひ」とだ?」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのでしが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊?」

「はい。私が所属しているのは・・・」

その後、俺は黒野の言つたことに耳を疑つた。

「私が所属しているのは・・・」<sup>ヤマト</sup>「」  
「C E D E F つてボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問

でもある組織だよな」

「作用で「じりこます。良ぐ」存じで」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知りてんな」

「はい。彼はボンコレ十代目、雨の守護者山本 武様の息子にあたります」

マジかよ・・・。

その後、俺は黒野の話を聞いた。話によれば、残りの守護者はある学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆづまでは知らないとのこだ。

まあその事に關してはいいや。明日からはちやんと自転車で行けるから今日よりはゆつくつと行けるからぐつすり寝るとしてよ。こつして俺は眠りについた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「集まり始めたな・・・」

「ああ・・・」

「ボン」「コレ」とシモンのよつな・・・」

校長室には一人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ眞の後継者が・・・」

その校長室には柔らかい月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・（後書き）

まさかの黒野がC E D E F とゆうオチ・・・。

次回も頑張ります！

（ ）

## ルームメイトはお嬢様？（前書き）

### 第3話

やつとヒロインの恋場です。

## ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そ  
う。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが・・・  
。

「こいつが俺の友人、佐久間 さくましようた 翔太だ」

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物  
なのだが、どうも不良のように見えない。

え？ どうゆう意味だつて？ ん～・・・ 分かりやすく言えば、なんと  
ゆうか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくい  
るじやん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあち  
ゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のランクーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。  
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？ 綱吉さん？？」

「ああ」

佐久間はあつさりと答えた。

「どうが？」

「まあ、なんとかわからんねえけど、とにかく似てる」

「は、まあ…」

こうして新たな仲間が増えた。

寮の部屋割りが発表された。

えーと、俺は〇二七号室か・・・

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかつた。なぜなら・・・。

『あれ、今つて学生寮だつたのか』

そこに俺と黒野かいるあの屋敷たったのた

『なるほど。どうで無駄に広いわけだ・・・』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。  
入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「ああ。それで俺と翔太は同じ310号室になつたんだ」

「ふーん。俺とは少し遠いな」

「まあ、学校でも会えるし暇なとき遊びに行くよ」

「ああ。じゃあまたな」

山本達に別れを告げ、俺も自分の部屋に向かった。

「～～～～～～～～俺がちょうど部屋に着く手前で廊下の曲がり角から声が聞こえた。

「いいから、私の執事になりなさい！」

「それは出来ません！」

「どうしてよ！」

「私は」の寮の執事。あなた様だけの執事になる訳にはいきません

「そんなのどうでもいいでしょーーいいから私の執事になりなさい！」

なるほど、黒野と誰かが言い争っているのか・・・

「おこおこ、どうしたんだよ？」一人で言い争つて

「ああ。朱雀様。この方が・・・」

「私の執事になつてくれないのー！」

「で、この人は？」

「池沢 夏希様でござります。大企業、池沢グループの社長の一人

娘でござります

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさいー。」

「ですからそれは・・・」

「かしこまりました」

「え?」

「わたくし  
私があなたの執事となりましょ。お嬢様」

「朱雀様!」

「・・・あなたに出来るの?」

夏希が疑いの目で見てきた。

「「安心くださー。私、人のお世話は得意中の得意ですから

「や、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと・・・」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを

こつして俺と夏希お嬢様の生活が始まった・・・。

## ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いや～。今回は朱雀が執事になるとゆうつオチ・・・。  
次回も頑張ります！

えへっ♪・・・えひひひ様で・・・? (前書き)

#### 第4話

今回はリボーンに出でくる“あの人”が登場しますー！

えへっと・・・心配な様で・・・?

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか?」

「ええ。おかげでまことに・・・」とハサウエイ朱雀

「はい。何でしょう?」

「あなた何してるの?」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりしました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も一日が始まった・・・。

～～～～～～～～～俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。

「じめんね待たせて」

「いえ、ではまいりましょ」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ  
「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フフフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前らー！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

一人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で一人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話を聞いた。

「高嶺 朱雀だつたな。お前に決闘を申し込むー。」

「は、はあ」

「放課後、剣道場にこいー逃げるんじゃないぞー！」

と、言って持田先輩は去っていった。

はあー。どうしよう。しゃあない、行くか・・・。

「…」放課後、俺は剣道場にいた。だが何か様子がおかしい・・・。なぜならそこには剣道部員だけではなく一般生徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩ってそんなに強いのか?」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん・・・」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝つた方は賞品として、池沢 夏希を手に入れる事が出来るー!」

周りからは黄色い歎声（？）が聞こえてきた。  
俺はため息をつき、

「まあ何でも良いんですけど、人を賞品扱いするのはどうかと思いま  
すが・・・とくにお嬢様となれば・・・ただじやおきませんよ」

「始めるか？」  
「うん！」

「その前に僕の胴着は？」

そのんなのお構い無しに持田先輩は突っ込んで来た。

「無し・・・か・・・まいづか」

俺は竹刀を握り歩き出した。

「何もしてこないとは、アガの極みだな！」

失礼ながら持田先輩、それはあなたの方ですよ」

すると俺は持田先輩の一撃を必要最低限の動きでかわし、

一瞬の事だつた。

周りの生徒達は何か起つたのか分からずにして、しかし、山本と佐久間は、

「勝負あつたな」

「だな」

すると、持田先輩の面が真つ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しょ、勝者、高嶺朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こつた。

ふう・・・終わつたか・・・

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした。・・・。

～～～～～～～～～～～～ 時間は過ぎて今は夕食の時間。 夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そういえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思つたんだけど、あなた剣道したことあつたの?」

いえお嬢様。一度もありません。

「ウソ！ じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」

「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじやねえかよ』  
は?」

俺はあーと言ふ、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の描寫はなんだと思ひますか?」

「え? それはこんな風に食事を作つたり掃除をしたつ

「それももちろん大事なことド!」やこさす。しかし最も大切なのは  
主であるお嬢様を守ることド!「わこまわ

「え?」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていこう!」  
お嬢様は「わこまわ

夏希はその言葉の後、窓から見える円を眺めた。

えへっと・・・、あなた様で・・・? (後書き)

持田先輩・・・、「愁傷様です・・・。

次回は謎解きします!

殺しのワインはいかがですか？（一）（前書き）

第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回で自己最長のページ数です(」。。。)」

血ちる、頑張って読んだがだせ……（）

## 殺しのワインはいかがですか？（一）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりやそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君つて剣道やつてたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じでずっと質問攻めにあつていて。そんなどうして

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかっこーと、疲れてるみたいに見える」

「あたりめーだ！」ここまで質問攻めにあつて平気な奴を俺は見て見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かつていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけどな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほー、席に着けー。つーても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがつた。確かに、自習(じりゅう)でも先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まった。・・・。

授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰つていると、

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ！」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の一階に向かつた。

「どうしました！何があつたんですか？」

「あつ・・・ああ・・・」

その女性は田の前を指差した。そこにま、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座つて死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあつた。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「…………」「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・つてあなた何で知つてるの！」

おっと、口を滑らせてしまつた。今度から気をつけないと。

「実を語りつと今日、お嬢様を見守りさせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよー。」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やつぱり自殺なのかなー」

「と、言ごますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだつたわ。おそらく自殺するために使つたのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」  
俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にまさつぱり……」

『そつよね。刑事が一般人に質問してもね……』

夏希がそつ思つていると、

「しかし、お嬢様は今日何人から証言を聞いているはずです。その内容を詳しく話していただければ私なりの考えが述べられるはずです」

すると夏希は少し考へた後、

「分かつたわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「…」… まず死亡した男は、若林 辰夫<sup>たつお</sup> 62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいたら寝室での状態だったてわけ。

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見る、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたのだ」

て、誰でもわかるようなことを言つたんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらつしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、  
若林 輝男<sup>てるお</sup>は、

「刑事さん、ひょつとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一<sup>けいいち</sup>は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だといふんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないといつているだけでして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒な」とをいつんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修一は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っている」とだ。そつだる」

「ど、いこますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まさみとの再婚を考えていたのです」

「それで、眞さんとの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産田端たばに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は

「そりやあ、すげに落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思つて言つたんですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修一に、

「おい、お前ジッポー持つてたよな。貸してくれ」

やれやれと修一は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「曰那様は自殺などではありません！曰那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にしなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判つたわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取ろうとしているのでしょ？！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！」の恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おつと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろう。もう少し見たかたが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあつた見事な蔵書ぞうしょに目を奪われておりました」

「ちよつと一ちゃんと仕事しなさい。」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポット』の最新版さいしょがあつたのでござります」

「無視すんな！てゆうか入んちのものを勝手に取つてくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですかつてあつ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行つたんだけど、

「ええ。来ましたよ」

「どんな様子でした?」

「うーん・・・なんか陽気な感じだつたわ」

「はあ・・・」

「あつーでもカラオケで十八番を歌おつとしたり涙に泣き出して」

「涙に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか?」

「ん?ああ。最近、経費削減の為にからしをチュークから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね~」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」

「うふ。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいの事かな?」

「真夜中だよ。午前2時くらい」

少年は指を2本立てて答えた。

「雷の音で田が覚めてトイレに行こうとしたらおじいちゃん先生の部屋から小さな明かりがゆらゆら一つ動いてたんだ」「少年よそればどんな明かりだった？マッチか？蠅燭か？」  
「そこまでは見えなかつたよ」

まあ、この少年の証言は事件にあまり役立たなかつたわ。

「…………」「どう、朱雀。やはり若林辰夫は自殺つてことで問題ないでしょ」

しかし、俺は険しい顔をしていた。

「いいえ…………。それは大問題でござります。お嬢様」

「え？」

「お嬢様、これは殺人でござります」

「え！」

「失礼ながらお嬢様、お嬢様はどのあたりに毒があつたと思いまし  
たか？」

「えつと……。グラスに塗られていたとかは」  
俺は首を横に振り、

「いいえ、こちらを」「覗く、ださい。これは磨いたグラスでございま  
す。このとき指でふれた場合」「そして触れてみると、指紋がくつきりとついた。

「あー」

「」のよつこ、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかつた。つまり、考えられる事は一つ。ボトルの中に毒を入れたのでござります

「どうゆうつう」と?

「」のよつこを「」覗くだせこ

俺は黒野に一本のワインボトルを取り出させた。

「これは?」

「イーパーデーの1995年ものでござります

「ホントだ。値札が貼つてある」

夏希はボトルをジーッと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どうから見ても毒を入れるといふなんてどうにも無いわよ

俺は「あー・・・」と言つて、その後黒野と顔を見合わせ、せ

「あの・・・失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイツと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でござりますか?」

・・・・・ ハア？

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの・・・お怒りのようでしたらお詫びを・・・」

「謝りますむなうこんな態度しないわよー！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言うの？..」

「いきなり話が変わりましたね・・・。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし・・・」

「何よ

「今ここで犯人を言つてもお嬢様には理解いただけないかと・・・」

「」

「」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになつたが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「・・・かししまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続モドリガニマス」

田の前に料理を出すと、

「謎解モハトライナーの後にいたしましょ」

殺しのワインはいかがですか？（一）（後書き）

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。o( ^ - ^ )o

殺しのワインはいかがですか？（2）（前書き）

第6話

今回グダグダです。

殺しのワインはいかがですか？（2）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。

「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でござります」

俺はもう一度ボトルの口を見せた。

「よーへー」覗ください。」こに小さな穴が一つ空いてるのが見えますでしょつか？」

「え！」

夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が一つ空いているのが見える。

「これは？」

「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございましょう。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からぬのも無理はありません」

「ふん…どうせ私の目は節穴ですよー。」

「どうやら夏希はまだあの舌葉を引きずっているらしい。」

「で、その穴から注射針なんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでござります」

「メッセージカード?」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まあ、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考への、様子。しかし私はそうは思こません」

「どうして? だって辰夫さんは涙を流すほど思い惱んでいたのよ」「それは勘違いでござります。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言つていました。そこに涙の原因があつたのです」

「え?」

俺は一つの目を持つてきた。

「こちらに市販のチョーブのからしと練りからしを」と様子しました。  
ご賞味ください

夏希はまず、チョーブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「…」

「はー。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでござります」

「先に言つてよ」

夏希は涙田で言つた。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね~」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言つっていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でござります。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょうか?」

「えっと・・・。停電だったから?」

「確かにそれもございます。しかし、若林家人間はあそこに懐中電灯があつたことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くても困らなかつた人物に絞られます」

「そつか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でござります。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でござります。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使つていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さうに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして？」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのガスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修一から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかつたとゆうことになります。そしてさらに普通の100円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「そこは、圭一も除外されて、犯人は修一のことね！」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まあ、半分当たつていて、半分間違つてているといつて良いでしょう」

「え? どうゆうひと?」

「ここで先ほど話したメッセージカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確實に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え?」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか?」

「え? と? 確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か?」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。

そして、藤代 雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言つていました。しかし、あの時机の上には本など一冊もありませんでした」「

「確かに無かつたわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思つたことがありました」

「疑問に思つたこと?」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。10冊や15冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がござります」

「確かに。でもどうして?」

「犯人が暗闇のなか作業していくうつかり間違えたのでございました。恐らくその中に・・・」

「メッシュカードがあるってわけね。でも一つ分からるのは動機よ」

「遺産争いでございました。恐らく辰夫氏は藤代 雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す?私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれません。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

す。お嬢様は生涯お金に苦労する事はないかも知れません。しかし・

「俺はお嬢様の目を見て、  
「お金とこれらのはそれほど悪いしき物なのだと叫んで」とをお忘れ  
無やうう」と

夏希はしばらく黙っていた。そして、

「若林家に行くわよ朱雀」

俺は口元に笑みを浮かべ、

かしこまりました。お嬢様

一  
は  
い

扇からは藤代雅美が出てきた。

お邪魔するわよ

—え?  
「

失礼します

「え？ え？」

俺とお嬢様は真っ直ぐ辰夫氏の部屋に向かつた。

「ちよつと、何なんですかあなたたち…」

若林の人達も集まつてきた。

俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。

『これだ』

その本ねページをバラバラとめくつていくと、封筒のような物が挟まつていた。そこには藤代 雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。

「これに書かれたことせどりも本心ではござりません」

「どうゆうこと…」

「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょうか」

「どうして…どうしてですか…」

雅美さんは叫んだ。

「うむやーーお前が俺達の金を…・・・

「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代 雅美さんを新たな家族として加えたかっただけです」

「なに?」

「あひりやーーよこまく」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修一さん、春絵さんの生まれた年のワインでございます。そして、この鍵の番号は109。亡くなつた奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハツとした。

「やはり辰夫氏は亡くなつた奥様のことを忘れずに覚えていたのでござります。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかつた。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かつてたの？家族が共犯者だつて」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行つたと言つていました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だつたと言つていました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当は結婚に賛成していたのでしょつ」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によつて殺される。辰夫さんどんな気分だつたか」

俺達は黙りながら寮に戻つていった・・・。

殺しのワインないかがですか？（2）（後書き）

今回はあまり良い出来ではあつませんでした。  
次回頑張ります。(^-^)。

## 体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

### 第7話

今回は短めにしました。

## 体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近づき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあること  
が話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大将なんだが。  
。。。誰がやる？」

そう、話し合っていたのは一週間後に開催される体育祭のことだ。  
俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。  
そして今は、体育祭の田玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰  
が大将をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやつたんだが、候補になつたのは  
朱雀、お前だ」

「えー俺！ なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なあ

なあじやねえよーなあじや！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見た  
けど、ありやあ戦争だぞー！ 戦争！」

「え？ それが騎馬戦じゃないのか？」

「おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？ あんた見てないからそん

なセリフをサリッと言えるんだよー

「で、どうするんだ?」

うう・・・みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ!朱雀!」とか、「お前はヒーローだ!」とか、「もつと熱くなれよ!」とかいう気持ちが痛いほど伝わってくる。

『ここは・・・やるしかないのか?どうする・・・どうあるアーフル

そして迷った末、

「・・・分かったよ。やつてやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでこるとこ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ?」

その瞬間全員が石のように固まつた。  
てか、それ頭に入れてなかつたの?みんな?  
そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃ あ俺がやるよ

「ー山本!」

「こんうちこはやんねーとな。で、後は誰がやる?」

そしてそれから10分後、ようやく騎馬が決まった。

「よしー!体育祭まであと一週間。張り切つて!」  
「ゼー!」

。 。 。 。 。 。 。 そしてその夜 。 。 。 。

「そういえばお嬢様は体育祭には出ないのでですか？」

「出るけど、それがどうしたの？」

「いえ、私とお嬢様は別のクラス。出るとなれば戦う種目があるかもしれませんね」

「そつか。で、朱雀。あなたは何に出るの？」

「話したい気持ちはあります、しかし手の内を明かさない方が良いと思いますので、お聞きいたしません」

「そう。それじゃあ一週間後が楽しみね！」

「そうですね」

「そんじや朱雀。かけ声頼む」

「え！俺！」

「あたりめーじやん！お前、大将なんだから」

「そつか。  
んじゃあ」

俺は一息入れて、

「さて、いよいよこれから体育祭に乗り込むわけだが、これだけは忘れんな。・・・何が起ころうと、楽しんでこーゼ！」

俺は大きく息を吸つて、

「いくぞ！」

「――――――オオオオオオオオオオオオオオ――――――」

そして運命の体育祭が始まった・・・。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねwww.  
想像しただけで恐ろしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

---

謎解きはリボーンの後で・・・

2011年12月1日19時56分発行